

大特集

人は人に学ぶ

あの人々が背中であえてくれたこと



鈴木宗男(政治家)

野中広務に学んだ

「時には自分の感情をさらけ出したっていい」

「今の政治には情が欠けてしまっている。野中生は類い稀なる人情家であると同時に、「政治は恵まれない人のためにある」という愚直な政治の原点を教えてくださいました」
野中広務さん(18年逝去、享年92)との思い出を語るの、参議院議員の鈴木宗男さん(73歳)だ。「平和主義を徹底する政治家だった」と尊敬しているという。

97年、沖縄の米軍用地を継続使用するための特別措置法改正案が衆議院で可決された。改正案を審議した特別委員会で、委員長を務めたのが野中さんだった。

野中さんは、採決前の

委員長報告で「ひとこと発言を許してください」と前置きして、初めて沖縄を訪れた時のことを語り始めた。
視察中、野中さんが乗ったタクシーの運転手が急に車を止め、「あの田んぼのあぜ道で私の妹は殺された」と言って泣き崩れ、車を動かすことができなかったという。

野中さんはその時の光景が忘れられないと語り、声を震わせながらこう続けた。

「どうぞこの法律が沖縄県民を軍靴で踏みこむような結果にならないよう、若い皆さんにお願いしたい」
戦争の悲惨さを肌身で

親しい人からは「ノーさん」と呼ばれた

知る野中さんの心中から思わず漏れ出た言葉だった。議場は静まり返っていた。鈴木さんが語る。「充分な議論を経ずに採決するにいたった状況に違和感を持っていたのでしよう。のちに不規則発

総理大臣をも諫めた

時には目上の人間に苦言を呈することもあった。小渕政権の官房長官時代には、誰彼かまわず電話をかける、小渕さんの「ブッチホン」をこう諫めたと言う。

「財界人の中には、総理からしょっちゅう電話をもらおうと言って、自分の立ち位置を良くしようとする人もいます。総理になつた以上、どうぞ、電話をかける相手は選択されてはいかがですか」

小渕さんは毅然とした態度でこう反論した。「俺はこの電話で、中曽根康弘、福田赳夫両氏と選挙で戦ってきたんだ。

言として議事録からは削除されてしまいました。あらかじめ原稿を用意していたわけではなかったと思います。感情をさらけ出して、自らの信念を訴える野中先生の姿に胸を打たれました」

俺から電話をとつたら、小渕恵三ではなくなる」その時だった。野中さんは、すくくと立ち上がって45度に頭を下げ、こう言ったのだ。

「総理がそれほどのお考えでお電話なされているのであれば、私ごときが心配することではございません。先程の言葉は取り消させていただきます」鈴木さんは、はっきりものを言う野中さんの姿にすこみを感じたと語る。

「目上の人に苦言も呈するけれども、そこにしっかりとした考えがあつたことならば相手を尊重し、礼節を保つ。立派な

対応だったと思います」

鈴木さんには、野中さんとの忘れられない思い出がある。逮捕された鈴木さんの議員辞職勧告決議案が出た時のことだ。

面倒を見てきた後輩議員たちが、採決を欠席しようとしているという話が鈴木さんの耳に入ってきた。とはいえ、下手に棄権をすれば、「逮捕された人の肩を持つのか」と後輩たちのその後の政治生命に響く恐れがあった。

鈴木さんは弁護士を通じて、野中さんから後輩たちに、議員辞職勧告決議案に賛成するよう指示することを願ひ出た。「もう逮捕されたあとだったから、野中先生は私の相手などする必要はなかった。それでも、『鈴木さん、申し訳ない』と机に手をつけて泣いてくれたのです」

私利私欲が渦巻く永田町だが、時には感情を爆発させるほどの強い信念を持たなければ、真の政治などできるはずがない。